Komatsu Research & Advisory

335 Cannon Hill Lane
London SW20 9HQ
info@komatsuresearch.com
www.komatsuresearch.com

レポート

2010年4月23日

英国総選挙2010：第2回党首テレビ討論

22日（木）夜に第2回党首テレビ討論が行われた。前回に比べ激しいやり取りの応酬があったが、3党首とも互角のパフォーマンスで、番組終了後の調査では以下のようにほぼ3者横並びの結果が出た。

（質問：誰が今日の討論の勝者と思うか）

YouGov/Sun調査：	キャメロン36%	クレッグ32%	ブラウン29%
ComRes/ITV調査：	キャメロン30%	クレッグ33%	ブラウン30%
Angus Reid調査：	キャメロン33%	クレッグ35%	ブラウン23%

今回のテーマは外交と防衛。但し後半は一般質問に充てられる。会場からの質問は予め準備されているが、3党首には事前に知らされていない。8つの質問は、(1)EUに加盟しているメリット、(2)アフガンのような多国籍オペレーションに将来も参加するか、(3)気候変動対策として個人のレベルで過去半年に何をしたか、(4)秋の法王訪英に関しカトリックの様々なポリシーをどう思うか、(5)政治に対する信頼回復、(6)年金政策、(7)ハング・パーラメントでの連立の意思、(8)公平な移民政策。(3)と(4)は少々異質な質問だった。

先週の結果を受け、今回はキャメロン、ブラウン共に自民党の政策面の弱点を激しく攻撃。トライデント・ミサイルや違法移民に対するアムネスティなどに関するクレッグの答えは曖昧に終始した印象。保守党のヨーロッパ政策は他の二党から集中攻撃にあったが、窮地に追い込まれることはなかった。

前回冴えないパフォーマンスで支持率を落とし、党内右派からは「個人攻撃も辞さずに断固として”クレッグ・バブル”を叩き潰せ」との圧力も受けていたキャメロンは、「自分らしく(be myself)」の言葉通り自信に満ちたパフォーマンスで前回より良い出来。マニフェストのスローガンにも使った持論の「大きな社会(Big Society)」に言及する余裕も今回はあった。しかしながら、大きく他を引き離すほどのスマッシュ・ヒットにはならなかったのも事実。

本稿の内容については可能な限り正確を期していますが、万が一誤謬があった場合、Komatsu Research & Advisory（以下KRA）は一切の責任を負いません。本稿の内容は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、KRAの統一的な見解を示すものではありません。情報や見解は、予告なしに変更することがあります。本稿からリンクを張っている第三者のサイトのコンテンツに関しては、KRAはいかなる責任も負いません。本稿の内容を利用したことで生じるいかなる不都合や損害についてもKRAは一切の責任を負いませんのでご了承下さい。

ブラウンは「スタイルの勝負なら外れるが、中身の勝負なら私以外にない(I' m your man)」と経験と決断力を備えた、危機下に求められる強いリーダーであることを強調。トライデント・ミサイルに関するクレッグの答えに対しては、「私は実際に毎日この問題に取り組む立場にある。もっと現実的になれ(Get real)」とばっさり。また、保守党は「経済へのリスク」、自民党は「安全保障へのリスク」、と双方を攻撃。得意な数字を挙げ連ねての説明や、事前に準備していたのが明らかな冗句は退屈だったが、前回よりも自然体で、良くも悪くもブラウンらしいパフォーマンスだった。

クレッグは、前回のような意外性はなくなり、キャメロンとブラウンからの攻撃も厳しかったが、落ち着いて反論。最後のスピーチでは既成の二大政党政治（"Old politics"）の打破を訴え、「従来のやり方を変えることで、イギリスは世界を変えられる（Britain can shape the world around it by doing things differently)「何かエキサイティングなことが起ころうとしている(Something exciting is beginning to happen)」「物事は変わり得るんだ（It can!)と、まるでオバマ演説のようだった。

3党首とも大きく差がつかないパフォーマンスで、選挙戦はますます三つ巴の闘い(three-horse race)の様相を呈してきている。2週間後の投票結果がどう出るか予断を許さないが、今後自民党が保守・労働の2党と同等に扱われるような第3党になり、今回の総選挙が二大政党制の終焉につながるとの見方もだんだん強くなってきている。また、先週の第1回党首テレビ討論以来、党首個人のパーソナリティーやTVパフォーマンスがものを言う「米国大統領選挙型」の選挙戦となってきていることに対する警戒感も強くある。

井上　貴子（問合せ: tinoue@komatsuresearch.com）